

演題3. 若年者における歯周疾患の細菌学的検索

○八重柏 隆, 中野 久士, 大阿久國賢,
熊谷 敦史, 上野 和之, 本田 寿子*,
金子 克*

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座
岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座*

我々は若年者にみられる高度歯周炎の解明には、病変の長期的な経過観察が必要ではないかと考え、中学学童と高校生徒を対象に歯周組織を主とした年次の調査を立案し、過去3年間にわたり実施している。今年度からは、若年性歯周炎に関連深いと報告されている *Capnocytophaga* および *Actinobacillus actinomycetemcomitans* (以下 Aa) の細菌検査も含めて調査を行っており、その結果について報告を行った。

被検者は岩手県岩泉地区に居住する中学学童302名と高校生徒305名であり、歯周組織の診査を行った後148名について細菌検査を行った。その内訳は、健全な歯周組織を有する群14例、単純性歯肉炎群36例、増殖性歯肉炎群47例、歯周炎群51例である。細菌の採取はポケット深度を測定した部位を中心に行い、滅菌ペーパーポイントを約30秒間歯肉溝内に挿入した後、すみやかに小試験管内の ABCM-broth に入れアイスボックス内に保管した。24時間以内に各選択培地に塗抹し、candle jar, 37°Cにて *Capnocytophaga* は3日間、Aa は5日間炭酸ガス培養した後、各々判定を行った。

その結果、*Capnocytophaga* はどの群でも高率に検出されており、また年齢、性別との関連は特に認められなかった。一方、Aa は健全な歯周組織を有する例と単純性歯肉炎例では1割強で検出されたのに対して、増殖性歯肉炎例では4割弱、歯周炎例では4割強で検出されており、病態との関連が深いことが示された。しかし、年齢、性別との関連は明らかでなかった。

Capnocytophaga と Aa は若年性歯周炎患者の深い歯周ポケットから特異的に高い割合で検出されるとする報告があるが、今回の調査ではこれらの細菌と若年性歯周炎との関連は必ずしも明らかではなかった。

演題4. ハイドロキシアパタイト顆粒と海綿骨骨髄細片の混合埋植による歯槽骨部造堤法の臨床的検討

○大屋 高徳, 横田 光正, 宮沢 政義
藤岡 幸雄

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

下顎骨広範囲欠損に対する即時再建法は、純チタンの精密な鑄造技術の開発(オハラチタニウム研究所)により、これを下顎再建用リコンストラクションプレートとして臨床応用し、長期間の埋入が可能となったと同時に、一層の機能的ならびに審美的な回復がはかれるようになった。本法の再建は腸骨の小ブロック骨(3×2cm)をプレートと接して移植し、義歯装着の安定をはかった。

しかし、術後約3カ月から9カ月の間で約40~45%の移植骨の吸収が生じ、歯槽堤の再建が不十分であることが結論づけられた。そこで二次的にハイドロキシアパタイト顆粒と腸骨海綿骨骨髄細片を歯槽相当部に混合埋植した結果、歯槽部再建に効果的であることが結論づけられた。本法は、新鮮骨髄細片の優れた造骨性とさらに組織内での安定性の高い非吸収性ハイドロキシアパタイト顆粒の各々の長所により、術後感染もなく早期に正常の骨化により硬く歯槽堤が再建され、しかも術後において歯槽堤の異常吸収はなく、無歯顎例の2症例は12カ月と11カ月を経過するものの義歯装着後も何ら問題なく良好な歯槽部形態が形成維持されている。また、各種下顎運動解析においても、ほぼ正常に近い顎運動値が得られ、本再建法の有用性がうらづけられた。今後さらに症例を重ねるとともに、より義歯安定のための歯槽堤形態の再建法を検討してゆきたい。

演題5. 慢性下顎骨髄炎に対する外科的療法と高気圧酸素療法の併用による臨床的検討

○大屋 高徳, 渋井 暁, 松生 誠
長 浩臣, 藤岡 幸雄, 鎌田 桂*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座
岩手医科大学医学部高気圧環境学治療室*

顎骨髄炎は、抗生剤の著しい進歩により、急性期の症例に対しては治療が容易となった反面、難治